

# ICU で学んだこと タイの人たちが教えてくれたこと

浅井重郎

自己紹介をいたします。私は、浅井重郎（あさいしげお）74歳です。1962年4月、10期生としてICU教養学部社会科学科に入学しました。

中学生、高校生の時、私は、将来自分が何をやったらいいのか解らない、決められない生徒でした。私のまわりの友人たちは、医者、エンジニア、弁護士、化学者になりたいと決意をしていてそれぞれの大学に進んで行きましたが、私は、いつまでも「何をしたらいいのか？」という大きな課題を背負っていました。

ICUでの勉強の時は、その課題を考える上で貴重な4年間でした。そして新鮮な出発の時でした。

フレッシュマン・イングリッシュを振り返って、英語の特訓をして下さった先生方に感謝いたします。しかし、当時は、難儀な1年間でした。2年生になっても英語で授業を受けるのが難しかったことを思い出します。

## 1. ICU で学んだこと

### （その一）人の話を聴け

まずは人の話を聴けがICUに入学して私が最初に教えられたことでした。今もあるかどうか、毎週木曜日にはD館でコンボケーションと呼ばれる時間がありました。東欧の国の共産党党首（ロマドカ）、ネパールの山の中で働いたお医者さん（岩村昇）が、結核患者の診療の後消毒液がなくて自分の顔や手を日光消毒した話、ハーブシコードを持って来て組み立てて演奏して聴かせてくれた音楽家など、楽しさと同時に聴くことが、教養学部で学ぶことの肝心要であると学びました。

そして学生の仕事は、聴いた後によく考えて良い質問をすることと当時客員教授として来ておられたアメリカ人神学者のジョセフ・フレッチャー先生が、講義の中で強調されました。キリスト・イエスの福音は、教会の中、自分の心の中に閉じ込めるものでなく、社会の問題を考えて行動を起こすための原動力でなければならないとする「社会的福音（ソーシャルゴスペル）」の授業の中でフレッチャー先生は、「良い答を得るためには、良い質問を問わなくてはいけない」と何度も話されていました。良い質問のことを、何でそういうのか、アメリカ式に「64ドルの質問（sixty-four-dollar question）」といわれたことが思い出されます。

そして4年生の卒業間近の頃、アドバイザーの経済学グリーンソン先生の助言もまた、私の中で生きています。「就職して後、職場の人たちと人間関係がうまくいければ、仕事は全部うまくいく。解からないことがあれば先輩が教えてくれるから、それをよく聴けばいいんだよ。」は、その通りでした。タイの農場でタイの人たちと平和に仕事を進める上で、「人間関係がうまくいけば、あとは全部うまくいく。解からないことがあればタイの人たちが教えてくれるから、よく聴けばよい」とグリーンソン先生の助言は、そっくりそのまま当てはまる言葉でした。

## (その二) インドネシアのワークキャンプ

3年生の時、荒井俊次先生に勧めていただいてインドネシアには、バリ島にて行われていた長期ワークキャンプにICU教会から派遣していただきました。

インドネシアからは勿論のこと、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、スイスや韓国からの参加者があって、20人あまりの国際ワークショップでした。水田のそばに、にわか作りに作られた竹でできた宿舎に住んで、バリキリスト教会の農村開発企画を手伝って大きな豚舎やカエル養殖池、石灰を作るための炉の建設などを手がけました。リーダーのオーストラリア人クロウ牧師やオランダ人宣教師ヴィシュ夫妻に大変お世話になりました。

今でこそ有名な観光地バリ島は、50年あまり前、1960年代の半ば、外国人相手の観光事業は始まったばかり、村のクリニックには結核撲滅運動のポスターが貼られ、美しいサヌール海岸には大きなホテルを建設中でした。私が帰国した直後に政府によって全滅させられた共産党に島中が席卷されていました。

昼間は焼けた熱いアスファルトの道を頑丈な素足で歩き、夜になると何時間でも楽譜なしにガメラン（ガムラン）音楽を合奏する農村の人たちに、キャンパー達も私も親しく迎えられたことは幸いでした。農村のゆっくりとした生活から直接に学ぶところがたくさんありました。

例えば、バリの男の人たちは親しくなると男の人同士で手をつなぐ習慣があって、私も、大きな手をつないでもらって歩いたのが嬉しかったです。

また、田舎の教会へ歩いて訪ねて行ったときのこと、途中で道を尋ねた村人から「もうすぐそこだよ」と教えられたのに、行けども行けども3時間以上も歩くことになったり、ある時にはインドネシア人のおじいさんが私に「お前は、前の時にも来たのかい？」と尋ねるので、「え？前にも来たって、いつのこと？」と私が問ひ返すと、「ほら、日本人が大勢で鉄砲をかついでやって来た時だよ」と戦争中のことを言っていると解って、時間のとらえ方の違いに驚いたことがありました。

ワークキャンプが終わって私は、数人のキャンパーと共にバリ島からジャカルタまでジャワ島を旅行しました。途中で立ち寄った教会で礼拝の後、若い男の人が私に、「自分のお父さんは、日本兵にひどく殴られたんだ」と話してくれたり、私と同じくらいの歳の日本人そ

つくりの女の人が連れてこられて、「この人のお父さんは、日本兵だった」と告げられたりしました。私は何を話すことも出来ませんでした。大きな衝撃でした。

ジャカルタから帰国の途中に ICU 寮生を訪ねて香港に寄り道しました。ここで映画を見ました。日中戦争を題材にした映画でした。内容は何も解りませんでした。映画の中で「鬼子」と呼ばれる日本兵が射ち殺される度に、まわりの中国人観客が総立ちになって、拍手して大喜びする姿をまのあたりに見て、敗戦後 20 年経っても戦争の傷が中国人の心の中に深く残っていること、彼らとの和解が大きな宿題として残っていることを思い知りました。

### (その三) 裏方役でいること

ICU 3 年生の時に、英語劇「仲人役」(The Matchmaker) が企画されました。演出はデンマークから来ておられた先生、日本、香港やアメリカからの学生達が演じる劇でした。

アメリカ人学生ジョエル・マーチャントさんと組んで、私は舞台の上ではなく裏方役でこの劇に参加しました。練習は3ヶ月ほど続いて、明け方近くまで大道具などの準備をして、雪が積もっている中を寮へ帰ったら玄関が閉まっていた困ったことを思い出します。

D 館で演じられた劇の本番、その裏方役は、観客から見えないところにいるけれど、その役目は決して受身の消極的なものではなく、舞台の上で演じられることと同時進行で、その効果を高めるための必要な、積極的な役割があることを経験しました。

話は飛躍しますが、ICU 卒業後 10 余年、アジア学院の職員として働いたとき、日本外務省主催の日本の食料について日本とアジアの国々との関係を考えるセミナーに参加する機会がありました。

その席上外務省役人が、「日本人の食料をタイ国など東南アジアの国々の農民に作らせる」、「作らせる」と使役形で何度も発言したことに私は違和感と反撥を感じました。金持ち日本の、日本人の思い上がった発言ではないか。実際のところ食料自給率が低く、外国からの食糧が来なくなると日本人は飢えることになるのを棚に上げて、他国の農民に食糧を作らせるとは偉そうな、そんな言い方をしてはいけないと思いました。

アジア学院の研修生、マレーシアサラワクから来ていたイバン族のサギンさんが、私に話してくれたこと、彼のところで 100 ha もの大農場があって、その運営を外国人リーダーが全部取り仕切ってうまくいっていたそうです。しかし、イバン族の人たちは農作業に使われるだけで、農場運営について訓練されることはなく、その外国人たちが任期を終えて自分の国へ帰ってしまった後の農場は、荒れてしまったという話でした。私がいる亜熱帯のチェンマイでも、雨と高温で畑の雑草、雑木の成長が早く、ほんの 2 年間でも放置された農地はジャングルになってしまい、復旧が難しくなります。熱帯雨林気候のサラワクではその早さ、困難はなおさらのことでしょう。

フィリピンでは農村で新しい企画を始めるとき、そのためのリーダーに外国人を立てるこ

とはないと聞いています。

マケーンリハビリテーションセンター付属農場は、同じようにタイ人がリーダーシップをとって運営する場所です。もっと上手に出来るからと外国人がその機会を奪って運営がうまくいったとしても、いずれは逆戻りしてしまいます。アジアの国々が日本の植民地であるかのような外務省役人の国対国の態度を私を変えることは出来ないとしても、その代わりに人対人の立場で農家の人たちと共にいて手伝うことが出来るのではないかと、目立たなくても、そうありたいと願ってきました。

#### (その四) 日本人の冒険心

他の人たちと少し変わっていて、私は、ICUで明治維新以降の日本史を勉強しました。

400年前の昔、日本が鎖国政策をとる前には西洋の技術者がやって来て日本人に造船の技術を教えました。1610年には太平洋を航行できる船を造って、西洋人から航海術を学びながら日本人が浦賀からメキシコのアカプルコまで航海した記録があります。しかし、

1621年 日本人の外国船便乗禁止

1633年 日本人の奉書船以外の海外渡航禁止、在外5年以上の者の帰国禁止

1635年 鎖国令 海外船入港を長崎に限る

日本人の海外渡航、帰国禁止

500石以上の大型船舶建造禁止

などのいくつかの禁止令によって、日本人の航海術は「何とか松」など海岸の目印に頼る沿岸航海に衰退してしまいました。

鎖国令から230年後、明治に開国して禁止令が解かれた日本人は、たちまち造船と遠洋航海の技術を学んで海外へ出かけて行くようになりました。(明治)「元年者」と呼ばれたハワイ農民移民をはじめとして、北米、南米の見知らぬ土地へ出かけて行った農民や49トンの小さな漁船に乗って遠洋漁業に繰り出していった漁師たちの、いずれもふつうの日本人の挑戦の心意気と冒険心に、私は、畏敬の気持ちをもちました。

その一方で富国強兵の国策の下、開国の1868年から太平洋戦争無条件降伏で日本が滅びた1945年までの77年間に、ほとんど10年毎に大小の戦争を仕掛けたり、加わったりした日本の暗い歴史にも眼を向けることになりました。

卒業論文は、1900年から1924年の「日本人排斥法」成立に至るまでのアメリカでの日本人排斥運動の経緯を調べて、カルフォルニア州で何故日本人農民がアメリカ人から排斥されるようになったのかについて考えて書きました。

## 2. タイの人たちが教えてくれたこと

### (その一) 隣国と戦争しない、仕掛けない人たち

タイ国は、東はラオス、カンボジア、西はミャンマー、南はマレーシア、北はミャンマー、ラオスに地続き国境線で囲まれた国です。

たまにカンボジアやミャンマーと国境線の位置が問題になって、小競り合いの衝突が起きるニュースがあります。しかし、宣戦布告するような戦争になることはなく、歴史の上で最後の戦争が700年前に起きたものです。それまでタイ国を占拠していたビルマを国境の向こうへ押し返したのです。その時のタイ国戦士スリヨータイ（女性）、ラムカムヘン、タクシン、ナレースワンマハーラートなどの人物は、今も英雄として度々映画にもなって語り継がれています。

日常生活に眼を移して、公の場での大声の論争、口論を、私は、今まで見たことがありません。たとえば、「バイクの街」といわれるチェンマイで、バイク同士が「ガチャン」と接触事故を起こした時でも、事故当事者たちが大声で怒鳴り合っている姿はなく、双方静かに警察官がやって来て裁定するのを待っています。クルマ同士の接触や追突事故の後も同じこと、静かなものです。

農場でも何かの行き違いで口論が始まった時には、まわりの人、とりわけ年長者が早目に気を配って落ち着かせるということがありました。

小学校の職員室で見たこと、ケンカをした2人の男子生徒が連れて来られたとき、教頭先生は、その2人を床の上に向かい合わせに座らせてそのままにしておきます。「2人ともケンカの原因を考えて、仲直りが出来たら行ってよろしい」とのこと、「先生がいいと言うまで廊下に立っていなさい」という日本のやり方とは違うのを面白いと思いました。人と人の間の対立や紛争をお互いに向き合うこんな形で解決するような教育が、若い時から行なわれているようです。あるタイ人が解説してくれたように大声の口論は、犬のケンカと同じようなもの、動物的で卑しいものとする仏教の教えが根強くあるようです（犬は、非常に卑しい動物とされていて、その頭を触った手で人に触れてはいけなとさえ言われています）。

しかし、こんな日常の静けさとは全く逆に、毎晩のテレビドラマでは立派な大きな家で、きれいな服を着た美男美女の主人公たちが、眼を吊り上げてものすごい口論を繰り広げています。耳を覆いたくなる大声、怒声、しまいには泣くドラマをタイの人たちは楽しんでいるのでしょうか。それは、日頃の憂さ晴らし、ストレス発散、日中の静かな態度にはその場で出してはいけな大きな憤懣が込められているということなのではないでしょうか。

### (その二) 目と目が会うとニッコリする人たち

四海に囲まれている島国の日本と違って、四方が外国と陸続きで接しているタイ国は、地面に国境線が画かれている訳ではありませんから、何者なのか判らない外国人たちが入ってきます。誰か判らない人でも目と目が合えばニッコリするのは、自分には敵意がないことを

相手に示す、ひいては自分を守ることから生まれたと私は思っています。

タイ式の挨拶は、顔の前で両手を合わせる「ワイの礼」をします。それは知っているとしても「ワイの礼」をしていましたが、ある日、それだけでは不十分なことを知らされました。若い母親が3、4歳位の女の子に「ワイの礼」を教えているのを見た時、女の子が手を合わせるとその母親が、「ニッコリするのよ、ニッコリよ」と教えているのです。あ、そうか、ニッコリすることもタイ式「ワイの礼」の一部なんだと知りました。

航空会社の窓口で私が航空券を買って、お金の支払いが全部終わった時、男の人でも女の人でも係の人が私にニッコリするのを見ると、私は、ああ、いいなあとなんだか嬉しくなります。目と目が会った時も、「ワイの礼」をする時も、ニッコリしない日本人は、怖いと思われるそうなんです。

### (その三) 口を大きく開けて話す人たち

小学生の時、音楽の先生から「皆さん、口を大きく開けて、はっきりと歌いましょう」と習いました。しかし、どの先生からも「口を大きく開けて、はっきりと話しましょう」と習った覚えはありません。

学生の時、ある新聞記者が仲間と一緒にフランスの田舎を旅行した報告の記事を読みました。フランス人のおばさんが、

「日本人で不思議ね。お互いに口をほとんど開けなくても、動かさなくても会話ができるのね。」

と言ったというのです。

私も気をつけなければいけない、口を開けてははっきり発音しなければいけないと思っていましたが、タイ国に来てタイ語を話している時、農場のおばさんから同じことを言われてしまいました。

「日本人は、口を開けないで話すのね。」

9つの母音と5つの抑揚（5声）があって、謳うように話すタイ語は、5つの母音と抑揚の区別のない日本語と異なって、その母音の通りにはっきりと口を開けないと意味が伝わらない、または、全く違った意味になることがあります。

日本のテレビのニュースを見ていると、政治家や大学教授など大人から中学生に至るまで、口を開けないで話す人は多いです。聴いていても解り難い、解らない話し方は、日本人の毎日の人間関係にストレスを起こしていると思います。たとえば、

「さっき部長さんから何か命令されたんだけど、はっきり発音されなくてよく解らなかった。今何と言われましたかとは尋ねにくいし…困った。」

ことが起きることになります。

口を大きく開けて、はっきり話すことを大人に訓練するのは手遅れ、早く幼稚園、小学生の時から教えて訓練を始めるのが好いと思います。そうすることで日本人の人間関係のストレスが少なくなることを期待します。

(その四) 「仕事は大切、そして必要。しかし、それは人生のすべてではない」を生きる人たち  
学生の時に

「仕事は大切、そして必要。  
しかし、それは人生のすべてではない。  
人は愛を謳うが  
仕事を歌う人はいない…」

と始まるドイツ人の詩を読みました。仕事のことばかり考えている、やっていると終いには一人ぼっちになってしまいますよという詩でした。全部を暗誦しなかったけれど、私も、そうだよ、と思いました。しかし、そう思いながらも仕事にはまり込んで、家族や周りの人々を省みない時が度々ありました。

この詩とは対照的に日本には働くこと、仕事を余りにも極端に讃美する歌があります。

「働いて、働いて、働きぬいて、  
遊びたいとか、休みたいとか、そんなことおまえ、  
いっぺんでも思うてみろ。  
そんな時や、テツヤ、死ね！  
それが、それが人間ぞ、それが男ぞ。」  
(「母に捧げるバラード」作詞武田鉄矢)

このリハビリセンターでは午後4時30分に仕事が終わるとまだ明るい夕方、子どもたちと遊ぶお父さん、フットボールを練習する若い人たち、芝生に座って雑談する人たちが、ゆっくりした時間を楽しんでいるのを見ると、ああいいなあと思います。

(その五) 高速度タイ語を話す人たち

3つものタイ語学校に通って、私は、読む、書く、話すタイ語はなんとかできるようにな



りました。タイ国文部省のタイ語能力検定試験（小学校6 製程度）にも合格しました。しかし、いつまで経ってもタイ語のニュース、テレビドラマや映画、教会礼拝の説教を聴いても解らないでいます。

タイ人になってしまった我が家の娘、息子たちが楽しそうに話し合っているのを父親の私が聴き取ることができません。どこで勉強のやり方を間違ったのか振り返って考えずにはおれません。

その一つには、タイ語の語彙が足りないこと。知っている単語を努力して増やしていかなければなりません。

もう一つは、タイ語の話言葉が速いので聴き取れないからと、私は、いつもいつまでもゆっくり話してくれる人だけを探していました。早く話す人を避けないで初めから速いタイ語をよく聴く心構えと訓練が必要だったのです。

私たち日本人は、外国語を読んだり書いたりするけれども聞くのが下手だといわれています。上記のことは私が他の外国語を学ぶときにも気をつけなければいけません。そして、教える先生もまた、生徒が解りやすいようにとゆっくり話すことは、かえって上達の妨げになります。

## 付録 1.

マケーンリハビリセンター付属農場で働いて困ったこと、嬉しかったこと

### 一、困ったこと

#### （その一）排水路の改良

このセンターは、チェンマイ市を南北に流れるピン川の下流 8 km に出来た大きな中洲にあります。1987 年に大雨でピン川の水が入ってきて大洪水になりました。その後の排水が悪く、ピン川の水位が下がった後も腐った水が2ヶ月以上も滞りました。

これを見て私は、すでに農場内に掘られていた全長 800 m の排水溝の改良を思い立ち、10 m 毎に溝の底に杭を打って、これを水準測量して凹凸を調べました。ピン川の水位の変化が判らないので出口の高さを決めるのが一番難しかったのですが、始点から 2/1000 の勾配で水が流れるように計算しました。測量結果に従って底の部分の削ったり埋めたりする作業は農業課人たちと一緒に力を合わせました。出口の部分は、道路を掘り割って大きなコンクリート管を入れて完成しました。昔発病前には土木技師だった営繕課リーダーのパイロットさんは、大雨の後で排水が流れるのを見て、「うまくやったね」と褒めてくれました。次に来た大水の時は、2 週間くらいで地面が乾きました。

しかし、その後…。

農業課リーダーが、もっと早く排水するために排水溝の始点と終点の高度差をもっと大きくするしかないが、それはもう出来ない、全体を掘り下げても意味がないと私は説明するの



ですが、聴いてもらえず、結局、7万バツをかけてユンボ（掘削機械）で排水溝は1 m 深くなりました。しかし、ピン川に注ぐ出口は道路下コンクリート管になっていて、掘り下げることが出来ず高さは前のまま。水が流れていた排水溝全体に水が溜まることになり、ここに魚を飼うことになりました。

### （その二）落ち葉はゴミ

60 ha の大きな森になっているセンターには落ち葉がたくさん出来ます。私がおこにきた当時これは、各所に掃き集められ、ゴミとして焼き捨てられていました。落ち葉掃除を担当する営繕課の人たちにとっては、落ち葉はゴミ、焼き捨てる方が手っ取り早いでしょう。落ち葉が肥料（堆肥）の材料になるのだから焼かないで置いて下さいと頼んでも、なかなか聴いてはもらえませんでした。その後浅井が欲しければ早く自分で持って行けに変わりましたが、間に合わないと焼かれてしまいます。一所懸命に落ち葉を集めていると、「そんなにたくさんゴミを集めてどうするのか」と尋ねた人がいます。「あの日本人は、はるばるやって来てゴミを集めてまわっている」と笑った人もいたそうです。

私がお作った堆肥でキャベツやブロッコリーをを作って、センターの中で売しながら、落ち葉が堆肥に変わって、それが野菜に変わることを見てもらうこともしました。

10 年余りもそうしていると、チェンマイ市の条令で落ち葉を焼いてはいけないという禁止の通達が出されました。落ち葉を焼いている煙を見てお巡りさんが来て、罰金を課せられることになりました。その理由は、毎年ひどくなるチェンマイ市のスモッグが、隣のミャンマーの山村の人たちがトウモロコシの種を蒔く前の焼畑の煙が原因だと判って、ミャンマー側へ抗議したいけれど地元のチェンマイで落ち葉を焼いていたのでは抗議できないためというものでした。こんなことでセンターで落ち葉を焼くことはなくなりました。私がお願ひしたからという訳ではありませんでした。これまでに 20 年が経ちました。

しかし、落ち葉はゴミの考えは、人々の中に根強く残っているようです。今は焼き捨てるから掃き捨てるに変わり、私は、目立たない不便なところに捨てられた落ち葉を集めてまわります。人々の生活習慣が、そう簡単には変わらないことを思い知ります。

### （その三）朝の打ち合わせ会

リハビリセンター付属農場で働き始めた頃、毎日の働き人の仕事の分担を決めるのはリーダーの仕事でした。働き人はリーダーのまわりに集まって、今日は何をするんですかとリーダーに命令されるのを待っているというやり方でした。

これに対して私は、7時45分からの礼拝の後に15分ほど昨日何をやったか、問題点はなかったか、今やることは何かを各自が話す打ち合わせ会を提案しました。これはアジア学院の朝の集会を真似たものでした。

このやり方は、自分の考えを言う機会でもあることから働き人の間では受け入れられて3

～4年間続きましたが、リーダーからは不評でした。リーダーの考えや計画に沿って働き人を使えないことがある、働き人の方が現場の状況を（リーダーより）よく解っていてリーダーがやりづらい等の理由があったのででしょう、各自が考えを述べるのも、15分間の打ち合わせ会も時間のムダという声が度々聞かれるようになりました。そして次第に、働き人の間では結局、命令してもらう方がいい、何も考えなくてすむからに後退して、朝の打ち合わせ会は消えてしまいました。

幸いなことは、農業課を真似て始めた営繕課ではまだこれが続けられていることと、発展して始められた毎週月曜日朝の職員全員の集まりも続いています。

## 二、うれしかったこと

### （その一）お年寄りの人たちとの対話

ケオさん

マケンリハビリセンターのひと隅にあるお年寄りの人達の村バーンラムチャイ（心を合わせる村）に住んでいた（元患者）ケオさんは、両手とも指がありませんでした。この村の菜園を手伝うように本部の人から言われて私が畑に通うようになった頃、ケオさんが私に親しく話しかけてくれました。そしてある日「お前も定年退職したら、この村へ来いヨ。一緒にここで住もう。」と言って誘ってくれました。うれしかったです。ケオさんはしかし、いつ亡くなったのか、消えるようにいなくなりました。ケオさんの面影だけが残っています。

ウライさん

みかんとキャラメルを持って、おばあさんウライさんが畑の中へやって来ます。草取りの鍬を置いて私は、木陰に一緒に座ります。

—きのう家に泥棒が入って、大切な手鏡を盗まれてしまった。

—お前の誕生日はいつか？何とまあ、月も日も同じではないか。歳はちがうけど。

—私は、死ぬことは怖いと思っていないよ。

ウライさんの話は続きます。ウライさんが立ち上がるまで私は、ずっと聴いています。ウライさんも私が知らない間に亡くなりました。

ターさん

「手伝おうか」と78歳のおじいさんターさんが声をかけて、畑の草取りを手伝いに来てくれるようになりました。うれしかったです。浅井の有機野菜作りは儲からない、手伝ってもセンター職員の日当にもならないとそれまで手伝ってくれていた職員が全部他所へ引き揚げられて、残るは私一人でやっていた時でした。

このことを知ってICU同窓生の方々が、ターさんの日当のためにとお金を募って送って下さったこともうれしかったです。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。ありが

とうございます。

そしてターさんは、今も元気で草取りを手伝ってくれています。

### (その二) 移民ビザ

タイ国に住みたい日本人が一番困るのが、滞在許可が3ヶ月、長くて1年間とその度に更新手続きをしなければならないことです。私はリハビリセンターの上の組織のタイキリスト教会(C.C.T.)のお世話になって1年毎の滞在許可(ビザ)をもらっていました。これをもって長期の移民ビザに変えることを申請したところ、有機野菜の教師だからとわずか2ヶ月だけ待って許可が下りました。神様が上から後押しして与えて下さった、一生タイ国に居てもよいビザです。タイ政府の入国管理局という機関が、有機農業の意義を認めてくれたということです。

移民ビザの取得を申請したのには、次のような訳がありました。長女花恵(はなえ)がタイ小学校を卒業してタイ中学校に進学しようとした時、校長先生から「エーッ？」と驚くことを言われました。「外国人(花恵)がタイの中・高等学校で勉強についていけるのなら勉強しても構いません。しかし高校を終えても卒業証書を与えることは出来ません。」当時隣国からタイ国に入って来る難民には、タイ国内で子女に教育を受けさせたいためという人が多くあったそうです。タイ国民の税金で運営する学校、国としてそれは困るということで、この傾向を制御するため卒業証書は出さないことにしたのです。この方針の下で我が家の長女も難民の子女の一人と見なされることになったのです。私たちは、それぞれ日本国旅券を持っているにもかかわらずです。

それならば父の私が長期永住する移民許可をもてば、一家の誰もが難民扱いされることなく、卒業証書が与えられるのではないかと期待して、移民許可の申請となりました。とにかく中学校に入学して事態が変わるよう祈って待とうという妻の考えに従って長女は中学生になりました。そして、幸いなことに2年生になる時、当時のパンヤラチュン首相の政府によって制限が解かれ、旅券をもつ外国人にも卒業証書が与えられることになりました。

### (その三) 測量士資格国家試験

灌がい、排水路改良のため、見よう見まねで水準器を使って水準測量をしていましたが、1999年春から1年間、大阪にある近畿測量専門学校に入学して測量の勉強をする機会が与えられました。

単身帰国して自炊しながら、若い人達と共に測量の理論と実際を学びました。末の二男(りょう)が小学1年生になった年のこと、家族のことを思いながらの1年間でした。解らないところや野外実習も先生方やまわりの若い人達が親切に教えてくれました。無事測量専門学校を卒業して、2000年5月に受験した測量士資格国家試験に合格できたことが嬉しかったです。1年間頑張った甲斐があったと、とび上がるほど嬉しかったです。

## 付録 2.

### ハンセン病について

1983 年末から私が働いてきたマケーンリハビリテーションセンターは、タイ国北部チェンマイ市郊外にあるハンセン病の治療と居住の施設です。インドの次に 1908 年アジアで 2 番目にアメリカ人キリスト教宣教師ジェームズ E. マケーン博士によって設立されました。ここはハンセン病患者の治療、居住とリハビリテーションを目的としています。

マケーン博士の申請を受けて、当時の所有者であったチェンマイの王様が、この土地を即座に下賜されたと聞いています。その時王様が、「チェンマイの街にいるハンセン病患者を全部そこへ連れて行ってくれ。そうすれば街がきれいになって好い」と言ったそうです。結核やエイズも同じように病人を一ヶ所に囲ってしまう考え方は、100 年経った今も変わってはいないとソムチャイ所長さんは言います。

ハンセン病について短くお知らせします。

ハンセン病は、病原菌 (*Mycobacterium leprae*) によって起きる皮膚と神経の病気です。感染力は弱く、その感染経路は今もはっきりと解明されていません。大昔から恐れられていたような遺伝、前世の行いが原因の病気ではありません。

ハンセン病は、病原菌が神経を切ってしまうので、そこから先の手や足の感覚や眼のまばたきがなくなってしまう、怪我をしていても見るまでわからず、眼が乾いて失明に至ることになります。

1873 年（日本では明治の初め頃）ノルウェーのゲーハード A. ハンセン医師によって初めて病原菌が発見され、その後

1943 年 Dapson

1948 年 Clofazimine

1962 年 Liphampisin

の薬による治療が施されるようになりました。1981 年にはこの三つの薬を交互に又は合わせて使う療法によってハンセン病は完治する病気になりました。

マケーンリハビリセンターは、これらの薬による治療を受ける人が、50 年前には 1,000 人になった記録があります。

幼い子供たちを含む私たち 7 人が 24 年間このセンターの中に住みましたが、感染することはありませんでした。この病気が感染力の弱い病気であることの証人になりました。

ハンセン病は完治する病気になったけれど、この病気に対する社会、人々の偏見、恐怖は今も残っています。「病気を治すことの方が、社会の偏見を直すよりもずっと易しい」とマケーンリハビリセンターのスミス医師は言います。

(2017年10月3日、アジアフォーラム、シリーズ「ICUの学びとアジアの平和」第3回  
「ICUで学んだこと、タイの人たちが教えてくれたこと」講演原稿)